

コンケン大学での居候生活 (14)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

コロナ禍のもとで、身動きがとれないと言うことは、これまでも度々取り上げてきた。しかし、具体的にその状況が、実際にはどういう状態を意味するのかについては詳細には書く機会が無かった。ここでは「コロナ禍での生活の実際」について触れる。

チェンマイ大学を離れ、コンケン大学に移籍した大きな原因の一つは、学部長の 2 期 8 年の任期満了に伴う筆者自身の失職と言う事であるが、時期的に次期新学部長の就任がもう少し早ければその必要は無かったかも知れないし、またその可能性も大きかったとも考えられる。しかし新学部長が正式に決まっていなかった状況の下では、筆者の雇用延長に責任をとれる管理職はいない。前学部長の後期 1 期、とその次の学部長の 1 期、2 期を合わせた 2 期 8 年を終えるときも問題がなかったわけでは無いが、その時は既に後期の講義負担などが決まっていた事や、初めての事でもあり、あまり深刻には考えていなかったが、その時も任期を終える学部長に「自分はいったいどうなるのか」と確認に出向いた。運良く新学部長と目されていた人物への交渉が効を奏し、延長が可能となった。最も大きな延長への決断が成された理由の一つは、筆者がまだまだチェンマイ大学に取って「必要と為れていた」ことである。雇用先の工学部で筆者の果たすべき、あるいは必要とされる役割があったからである。工学部のみならず大学レベルの研究業務センターでのアドバイザー、人文学部でのアセアン大学コンソーシアムについての特別講義、**MBA (Management and Business Administration)** 学部での日本語、特許に関する特別講義、**STeP (Science & Technology Park)** での研究プロジェクト参加など、本来の工学部での業務以外の大学レベルの仕事や、大学レベルの大学院 **Graduate School** の教職員、ポストハーベスト研究所の教員で構成する訪問団のガイド役としてのインドネシアのボゴール農科大学への顔つなぎ訪問、自らが立ち上げた 3 大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムへの招待による母校三重大学、中国の江蘇大学、新たにホスト大学に加わったインドネシアのボゴール農科大学での事業開催での参加、研究プロジェクトの一因としての、ベトナムのノンラン大学、カンボディアの王立農業大学への度々の訪問、またチェンマイ大学をその構成メンバーにすべく努力し、その実現に導いた **SAFE (Sustainable Agriculture: Food & Energy)** への参加でインドネシアのいくつかの大学に、ワーク・ショップ、シンポ、サマー・スクール事業にも参加した。殆どは学術活動でのキー・ノートスピーカーとしての招待である。ミャンマーにもプラズマ技術に関するネットワーク設立、ワーク・ショップ開催のためのガイド役として訪問した。チェンマイ市に居住する外国人で構成する **Chiang Mai International Friends** の煙害防止に向けた地方自治体への提言活動、また同様に旧チェンマイ市内を長らえるメカ川の浄化活動など多くの社会貢献的な活動にも参加してきた。タイ

の大学の工学関係部門で構成する EIT (Engineering Institute of Thailand) を通じての地域コミュニティへの支援活動など多くに参加させて頂いた。そして、10 年を超える貢献を理由に感謝状も頂いた。さらにチェンマイ大学と日本の協定大学との国際会議やシンポジウムにも参加指せていただいたし、日本学術振興会 (JSPS) とのジョイント・シンポにも参加の機会を幾度か頂いた。しかし本命の専門分野での農業工学部門では、当初予定されていた博士課程の設置が叶わず、独自の学科設立が困難となることが判明し、それに伴いカリキュラムも大幅に変わり、学部からの農業工学分野としての学生募集ができなくなった。学部生への英語での講義は、理解力に欠ける学部生を避けて、もっぱら大学院の修士・博士課程の学生を対象とした講義が主流であったから、筆者が負担する講義は学部カリキュラムから消えた。この事は筆者自身の失職を意味し、加えて研究業務センターでの数年に及ぶアドバイザーのポストも政治的 (?) とも想われる過程で任期切れとなり、解任となり、負担すべき役割が無くなり、お払い箱となったというのが本当の経緯である。赴任当時は 10 人近い院生が居たがチェンマイを離れるときには殆どゼロと言う変わり方である。このような事になるのではないかと危惧し、早い時期から次のように提言して居た。すなわち所属の教員の中からヘッドとして一人を任命し、鞭を飛ばし、叱咤激励して、所属教員の学術活動、特に業績を伸ばし、論文数を増やすべくパブリケーションを増す体制を強くすべく、長年にわたり提案してきたが、ついに叶わず夢と終わった。所属関連教員自身の意識の持ち方がいわゆる公務員的であったと言うところであろうか。となるとそれ以上の長居はできなくなり、意を決してその後の身の振り方を考えなければならない。しかし 1 年という契約期間のうちに次の転職先を探す事は至難の業である。しかもコロナ禍で帰国することもできない。空港で必要書類の提示、PCR 検査、2 週間の留め置きとなると一度の帰国に 1 ヶ月を必要とし、場合によっては次回の入国は禁止となり、2 度とタイに戻れなくなるケースも想定為なければ成らなくなった。しかし旧知の友人、知人は多く居たが自身の就職先を探してくれと依頼する事だけは避けたいとの思いで、じっと沈黙を保ち、「成るようになれ！」と腹をくくりじっと耐えてきた。しかし自分をチェンマイ大学に呼び寄せてくれた教員が、そうした筆者の心情を察してか、あるいは自らの責任を果たそうという心温まる責任感からか、筆者が知らぬ背後で密かに転職先を探して居てくれたのである。自己の責任感への細かな心配りは管理職としての最高のマネジメントでもある。この事を知ったのがコンケン大学に移籍の 7 ヶ月前であったから、如何にタイでの再就職が難しいかが計り知れよう。自分もコンケン大学は知らないわけではない。知人に直接話をして自分の身の振り方を相談してもできないわけではないが、「相手が重荷に感じて、反って迷惑になるのではないか」と言う思いが働き、沈黙を維持為てきた。結果は最善のものとなって実現した訳で喜びもこの上はない。12 年間住み慣れたチェンマイ大学のゲストハウスを離れ、引っ越し荷物と同時に 1 日を掛けて車でコンケンに移動して、6 ヶ月を迎える。しかし日々の生活は孤独で、アパートと大学から与えられた自分のオフィスを毎日行き来する単純な毎日である。学生も大半はコロナ禍で自宅待機、授業はオンラインと言う事で、新

しい人との出会いの機会も無い。時間をもてあましていた方が適切でもある。そうなるとうちを貰って居る事への罪悪感すら芽生えてくる。何もせずに給料(手当)を貰っていると言う心苦しきも感じる。かといって何をすべきかが直ぐには出てこない。大学側の許可も要るだろうし、許可無くして勝手に行動して問題を起こしては成らないと言う配慮も働く。不本意だがこのままじっと耐えて時の過ぎるのを待つのももどかしい。そう言う中でこれまでに3人ほどのかつての留學生がコンケンに行く予定があるので会いたいと言う機会を得た。彼らは既に学部長補佐などを経験し、うち2人は大学の航空関係学部の学部長(逢ったときは学部長代行であったがその後昇格したかどうかは定かではない)、もう一人は別の大学の学術研究関係のディレクター(Director)といずれもしかるべき重要なポストに座して居る。この一人の友人がコンケンの飲料関係の企業でプラント関係のマネージャーの役に就いている。その彼が自分の部下に英語を教えてやってくれないかと要請してきた。後日その部下を引き連れて筆者のアパートを訪れてきた。いつものことながら、こうした依頼には快諾する様にして居るし、謝礼の一切も貰わないことにして居る(かつてチェンマイ大学でも学生のいくらかが英語を教えて欲しいと出向いたときには同じように対応した)。何故謝礼を貰わないかと言う理由は1)所属の学部の学生に対して優先的に対応すべきであるのに、それを差し置いてプライベートな事案を優先することはしたくない。本来タイに来て滞在している目的は相手国に貢献する事であるから、その対価を求めることは自分の信条ではないとの心得でもある。2)こうした活動を通じて自らも勉強する機会を持つことができる、と言う2つの理由に集約される。しかし別の観点から、最小であっても謝礼は貰った方が良いとする判断も無いわけではない。それは無料という状況では「サービスを受ける参加者側のモチベーションを下げる事にもつながる」からである。行っても行かなくても無料だからと言うことで安易に欠席して、いつの間にかその活動が消えてしまうことがあるからである。頼みに来るときはその様な気持ちでは無くても、無料という部分がモチベーション・アップを妨げる働きをするからである。サービスを受ける側に金儲けの意思がなくても事業の継続において妨げになる場合もある事を心得ておく必要もある。言いにくいことではあるが教育的観点からは指摘しておかねばならない。「自らが要請依頼して来ておいて、勝手に来なくなるのは失礼ではないか」と。

この企業の関係者からの依頼も、そうした事が生じないよう願っていたが、アポイントを定めたその日から、「車の車検で今日は行けないので次の機会にしてくれ」と言う。そして次の週が来たら、「いま車屋に来ている」という連絡が入る。「では約束の時間に会おう」と返事すると「少々遅れる」という。この言い訳のためでは無いと信じたいが「渋滞で遅れたという写真」をスマホで見せて如何にも言い訳らしく聞こえる。素直に「遅れて申し訳ない」と言うのでは無く、自分の事が優先した言い訳で「詫びの心」が含まれていない。いささか不満ではあったが、しばし様子見という対応をして居るとその上司というプラント・マネージャーから連絡が入り、「部下は良くやっているか」と言う問いあわせである。正直に「意を伝えた方が良い」と判断し、その旨正直に言うと、次回から姿勢が変わった。

本人が話題を用意し、筆記用具も持参し、分からない単語には質問し、此方が対応すると辞書で調べメモをする様になった。上司の言葉が謝金を上回る効果を発揮した一瞬である。

かつて大学紛争時代には「自主ゼミ」と名打ったセミナーが積極的に行われた。自らの意思で自発的に参加する事を促すものであったが、今時の学生の中にはそうしたモチベーションの高い学生を探すのは極めて困難である。アパートの近くのレストラン（屋台）で見かけるコンケン大学の工学部のTシャツを着た学生を見かけて声を掛けるが、一時的には知り合いになるが、その後は続かない。英語でのコミュニケーションが十分できないのもその理由の一つである。忙しいかも知れないが、それを推してまで再度逢おうというモチベーションの高さまでは行き着いていない。関心が無いのか、自分の事が忙しくてそれ以外のことを考える時間の余裕がないのか、いずれにしても連絡がないと言う事は興味も関心も無いと言う結論にならざるを得ない。何処にその原因があるのかを明確に把握することは難しいが、やはり教育にその原因があるのではないかと考えて居る。学生の大学での勉強姿勢を見ていると、やはり受け身 (Passive) である。この事は物事に積極的で無いと言う事にもつながるが、授業に出て講義を聴き、それで十分所定の単位が取得できて卒業できるという単純な発想のようにも見える。筆者はこれでは不十分であると説いている。期末試験にどのような応用力が付いているか、あるいはどれほど自分で勉強しているか、を把握するために、授業で言わなかった事を問題に出したら、「これについては習っていません」という返事が返ってくる。そこで就職試験では「貴方が習っているかどうかは問題ではない。採用する側がどの程度の知識を有しているか」を調べるために前もって出題範囲を告知して出題することはしない。大学の講義で聴いたことだけが知識という理解は間違っている。自分で知らないことを積極的に調べて、自分の知識とする事が必要である」と返してやった。修士課程の学生の中にもそのレベルが居る事を忘れては成らない。こう言う学生が出てこないための教育が必要である。教員のキャリアと豊富な経験、モチベーションを高めるための工夫などは教員の責任でもある。教員が大学で大学の先生として教えることで生活を立てている事は事実であるが、給料を貰うだけで無く、如何に「理想として目指す良き人材を育成するか」と言う工夫、熱意、使命感、情愛が、教える側に無ければ教育の効果、成果は生まれない。このあたりに原因があるのではないかと考えている。また、私企業の大企業にあるのであればそれなりの自覚と気品、責任を感じるのが普通である。英語を学ぶのだから英語だけを勉強すれば良いのではなく、英語は自分の知識や考えを相手に伝える道具であるから、どのような場面ではどのような内容の話をし、その内容はどのような文脈で話せば良いか、などと熟知し話すのと、その様な準備なしで話すのでは、聴く側に与える印象、理解の程度も異なる。大企業に就けばそれなりに、話題の内容もその地位に相応した、教養のあるものとする努力も必要である。また時には適当なジョークを入れるなどの余裕も欲しい。

正直なところ、コロナ禍での毎日は制限された環境の元での単純なルーチン・ワークに陥る時間が多いので、摂取エネルギーと消費エネルギーのバランスが取れず、体調を崩す事に

もなる。有り余る時間を如何に有効に使うかと言う点が問題となる。もっぱら開催されるオンライン・セミナーやミーティングに殆ど毎日参加し、頻繁に英語でのコミュニケーションの機会を持って、その理解力とポテンシャルを維持するべく勤める様にして居る。さもないといざという国際会議などへの参加において自信を持ってない。参加できる準備をしておくことの重要性を認識する事が重要と考えて居る。アカデミックな関係者、例えば教員や学生との接触がコロナ禍で制限され、顔を合わせる事や議論をする事までもが極めて少なくなっている。職員やスタッフとでは話題が合わず、孤独感を味わう毎日でもある。如何に時間を過ごすか、またそれを継続する精神的強さが、今は極めて重要であると考えられる。「備えあればあれば憂いなし」の諺の如く、いつでも行動できる準備を心がけている。

本報では、いささかとりとめのない話に成ったが、要約すればコロナ禍での生活をいかに有益なものにするか、それには自らのモチベーションを上げること、また教える側の人間として相手をその様な気分誘い込む教育的工夫への配慮、更なる関心が必要であること、またこれは自分が果たすべきミッションの再確認にもつながる。既に上述したが、殆ど毎日人との接触がないこのような単調な日常生活が続くと、ひょっとすると「自分は歓迎されていないのではないか」とか「周りの人が自分から意図的に距離を置いているのではないか」などと孤独感から不安を生じる事もしばしである。さらに仕事をして居る割合が少ないのに手当を貰うのは気が引ける」と言う一種の罪悪感や思いも湧き出してくる。しかし、だからと言って、ではどうすれば良いかと開き直ると「打つ手は殆ど無く、現状維持」と「ワクチンの開発待ち」と言うむなしい現実に戻される。